

共に笑おう！この教室で。

光英 VERITAS 中学校 三年 田端 美海

チューリップの植木鉢から、僕もそろそろ出ようかと、かくれんぼしていたダンゴムシが顔を出す。暖かくて優しい春の香り。そんな季節なのに、私の心はどんより、曇り空だ。もう一つの顔をもつ春。それは、「新しい」生活への、勇気や挑戦。不安や怖さが、心を支配する春は好きじゃない。リュックの中身は空っぽなのに、どんよりとした気持ちでいっぱいになった鉛のように重いリュックを、これまで私は幾度も背負い、一步を踏み出してきた。多くの人が抱く一般的な感情の一つだ。ところが、新生活を迎えるにあたって、この程度で済まない人がいることを知ってもらいたい。

この春、知人の男の子が中学一年生になった。彼は、見た目は普通の子供だ。だが、彼には特徴がある。制服が着られないのだ。彼は「感覚過敏症」なのだ。「感覚過敏症」とは、「五感などの諸感覚が過敏になっていて、日常生活に困難がある状態」のことだ。彼は触覚に対しての感情が特異だ。制服のずっしりとした重さや、パリッと糊のきいた新品の艶、匂い、慣れない素材に嫌悪感を抱いていた。更には、履き慣れたスニーカーでなければ外に出られない。安心感のあるフィット感やシワツボさのこだわりがあるのだろう。彼のお母さんは、長年寄り添っている息子の症状にはベテランだ。春休みの中、何度も制服を着る練習をしては、学校までの通学路を一緒に歩いた。その度に、洗濯、アイロンを繰り返し、大丈夫！という安心感を植え付けたそうだ。晴れて入学式、制服姿の彼とお母さんとのツーショット写真が送られてきた。今の所は大丈夫！と安心の文面の裏に垣間見える不安。皆と同じようにできない息子を知っているお母さんは、いつこの平穏が引っくり返されるのかと、母親もまた、毎日と戦っているのだ。

彼は入学前から、症状について学校に相談していた。学校側からは、支援学校の提案もあったそうだ。一人だけ違うことをすれば、偏見や攻撃の目で見られるのを懸念してのことだろう。私は、彼と共に生活することで、彼に関わる周囲の

人々が、人権に対して理解し、思いやりの心を育む学びに繋がっていくのではないかと思った。

これこそが今、日本が推進課題の一つとして取り上げている、インクルーシブ教育だ。日本では、「障がいのあるなしに関係なく、共に学ぶ仕組みを」と定義している。ハンディキャップをもつ子供の生活に寄り添い、共に歩み、学ぼうと推進を始めた社会。ただ、この目標を実現する為には、まだまだ整備しなければならない課題も多い。特に、健常者の保護者の声を聞くと、様々な負担が不安の要因となっている。私が小学生の頃、学習障がいがあった男の子がクラスにいたのだが、腑に落ちなかった出来事がある。次の授業に遅れないようにと、図工の課題を素早く終えた私。もう少しやりたかったと思っていた児童達。ところが、次の授業が始まっても彼は図工室から一人戻ってこない。暫く経って完成を喜んで戻ってきた彼を、先生は褒めたが、皆は歓迎することができなかった。あの子は特別だからしょうがないんだと、自分の気持ちを押し殺した。又、障がい者側も個々の理解能力に合っていない場合、授業に参加できぬまま時間をやり過ごすということになっては、意味がない。まずは、双方のメリット、デメリットを考える必要がある。

更に、海外に学ぶ取り組みも注目したい。北欧諸国では、学校内外の外職種の人材がチームで関わっているそうだ。日本は、学校に負担がかかるという概念を捨て、多くの専門分野から仲間が手を取りあい、歴史を刻んでも揺るがない土台作りから始めてほしい。

二十四万人。二〇二二年度の小中学校、不登校の人数だ。昨今の生活環境も関係して、個々様々な要因を秘めている。そもそも、学校にすら行くことができない子供達が大勢いる。日本が抱える子供への課題は山積みだ。一人一人の子供達に手を差しのべる声が、行動が、日本に広がっていきますように。

「もういいかい？」と声をかけても、ダンゴムシみたいに人間は簡単に顔を出せないこともある。初夏になってもあなたはまだかくれんぼの途中。「まあだだよ。」あなたが顔を出せる日まで、私は今日も学校で待っている。あなたの居場所は…いつもここにある。